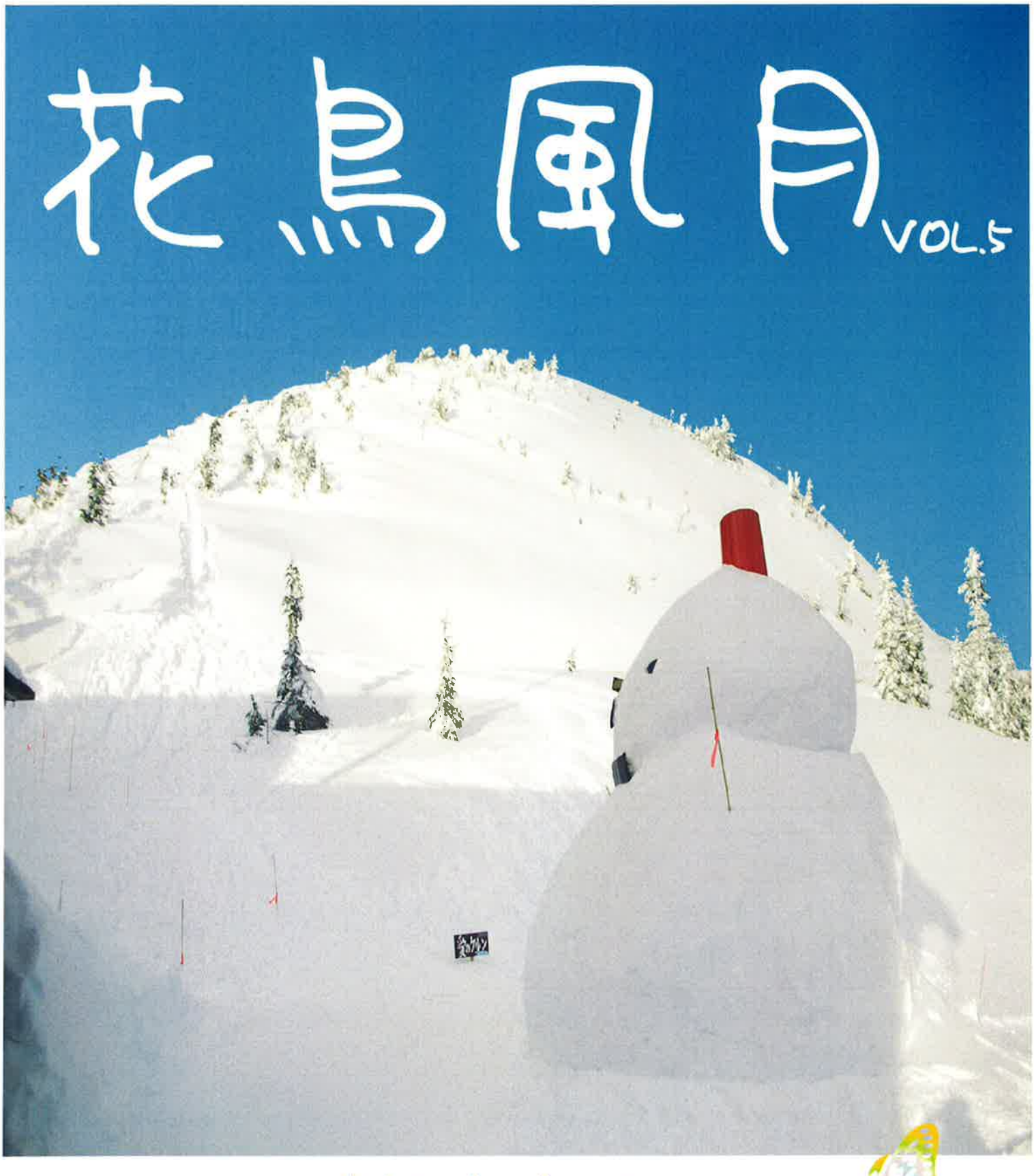
# 花鳥風月 VOL.5



## ~自然と友に生きる~

# -communion with nature-

■インタビュー記事《 ㈱山長商店 代表 榎本さん, 山谷御夫妻 》
■自然素材住宅のお宅拝見 ■暮らしの歳時記 ■イベント情報

INTERVIEW1

紀州 山長商店十代目当主
# 榎本長治さんに聞く

いわゆる「紀州材」の産地、和歌山県で林業を営まれる榎本さん。5000ヘクタールにも及ぶというその山林は、紀州はもとより、個人所有としては全国的にも有数のスケールです。豊かな森林資源を持ちながら、輸入材との競合など厳しい経営環境が続く今の日本にあって、林業家はどんな思いで事業に取り組んでいるのか。お話を伺いました。

## 山は社会からの預かりもの

「循環型社会」という言葉が盛んに聞かれるようになったのは、最近の話。でも、ずっと以前から循環型のビジネスとして歴史を重ねてきた分野があります。その一つが林業です。伐採と聞くと自然破壊を連想する人がいるかもしれませんが、正当な林業は切って売って終わりではなく、農業と同様、育てて収穫するビジネスです。木なんて植えれば勝手に育っていってくれそうなものですが、実のところそうはいきません。恐ろしく手がかかる。林業とはどんな商売なのかという私たちの問いに、榎本さんは八代目当主であるお祖父さんが口癖のように語っていたという言葉を教えてくれました。

『われわれは、社会から山をお預かりしているんだ。お預かりしている間は、それを少しでもいい山にしていくことがわれわれの使命なんだ。』

山というのは、人の手が加えられることでいいものになっていくのだと榎本さんは言います。そこに植えられた木も、放っておいてはいい木に育ちません。だから常に適切な管理をして、山を経営していく。そうすることでやっといい山ができるのだそうです。個人の資産というより、預かりものであり使命であるという感覚。これこそが今日、榎本さんたち日本の林業に携わる人たちの心の糧なのかもしれません。というのも、

株式会社山長商店
創業は江戸末期。林産物木炭問屋として
和歌山県南部の山林を集積し、林業を営む。
明治初頭より建築材としての杉・桧の育林事業に
移行し、「紀州材」の生産者として地域の中核的な
役割を担う。

日本の林業は長い間、厳しい経営環境にさらされ続けてきたからです。

## ■拡大造林、そして輸入材の台頭

昭和２０年代から３０年代にかけて、世は戦後の復興期。日本では木材の需要が急増しました。供給が追いつかず、木材不足となって、この時期に国策として「拡大造林」が行なわれました。拡大造林とは、広葉樹を中心とした天然林を、針葉樹を中心とした育成林に置き換えていくことです。背景には、エネルギー革命もありました。家庭燃料の主役だった薪や木炭などが、この時期に急速に電気や石油、ガスなどに切り換わっていきました。価値の薄れた薪炭林としての広葉樹は、建築用材などとしてニーズの高い杉や桧へ。拡大造林は日本全国で進んでいきました。

他方、やはり昭和３０年代には、不足する木材の需要を補うために「木材の輸入自由化」が始まりました。国産材と比べて価格が安く、かつ大量供給が可能な輸入材は瞬く間にシェアを伸ばしていきました。さらに昭和５０年代になり、変動相場制への移行で円高が進むと、いよいよ輸入材は国内市場を席巻。昭和３０年代には９割以上だった木材自給率は、２割ほどにまで落ち込んでしまいました。

県土面積の4分の3以上、約77%を森林が占めるという和歌山県では、木は古くから人々の生活の糧となってきました。「林業」というように、それは多くの人が従事している一つの産業です。木を育てて出荷するまでには、実に多くの「仕事」があるのです。地拵えに始まり、植林、そこからおよそ１０年間は下刈り、雪おこし、つる切り、枝打ち。１５年を過ぎると植えた木の育ちを妨げる灌木などを伐る除伐、さらに林内環境を良くするための間伐を行ないながら、半世紀から１世紀を経て伐採し、やっと商品としての木材になるのです。そうして再び、また一からのサイクルを繰り返していく。

こうした地域の産業とそこに関わる多くの人たちの生活、つまりは山村社会を守っていかなければならないという思いもまた、槇本さんたちが林業にかけるエネルギーの源となっているに違いありません。

伐採後の植林

## ■生き残りをかけた取り組み

実際、各地で廃業した林業家も少なくなく、山林荒廃や山村地域の活力低下が社会問題化しています。手をこまねいていては生き残れない状況の中で、槇本さんも存続をかけてさまざまな手を打ってきました。その一つが、一貫生産体制の構築でした。

木材の流通は、もともと分業で発展してきました。山主は山で立ち木を売り、伐採業者が買う。買った木を伐採し丸太にして市場に出す。それを製材業者が買って製材し、製品市場に出す。それを仲買人や小売業者が買って工務店に販売し、大工さんが加工して家にする。しかしこういう流れでは国産材の持つ特徴や良さも下流まで伝わらず、輸入材と一元化されて価格だけで判断されてしまう傾向がありました。

これを何とかしなければいけない。建築用材では近年、図面に合わせて事前に工場で精密加工するプレカット加工が一般的になってきましたが、そのプレカット加工までの一貫生産体制を自前で築くことを槇本さんは決意しました。川下までの工程を取り込むことで原木の相場のみに翻弄されることなく、林業のサイクルや山村社会の維持に利益を還元していける可能性を広げられることになります。プレカット工場は平成9年に完成し、操業を開始しました。

この効用について、工務店と直接取

乾燥機に入れられる杉材

り引きができるようになったことが大きいと榎本さんは言います。以前は自分たちの山から切り出された木がどう使われているのかほとんど見えなかったけれども、工務店から直接受注することで施主の考えまでもがある程度わかるようになってきたからです。同時に、そういう接点ができたことで榎本さんたち生産者側の思いや国産材の価値について伝えることもできるようになってきました。まだ小さな一歩ではありますが、これも国産材の未来を開く新たなステップにできるかもしれません。

出荷待ちの杉材

## ■より良質な製品作りのために

植林、育林から伐採、製材、乾燥、そしてプレカット加工に至る一貫体制を整えたことで、榎本さんが実現できたことがもう一つあります。それは、納得のいく品質のいい木材を供給できるようになったことです。輸入材に対して国産材が価値を認められ、より多く利用されていくためには、芯持ち材の活用が不可欠です。きれいに木目の通った無垢材はほれぼれするほど美しいものですが、反りやねじれ、割れなどの問題が出る可能性も併せ持っています。それらを抑えるにはしっかりと乾燥させることが必要で、榎本さんも長年にわたって質のよい木材を作るための乾燥のやり方を研究してきたのだそうです。そして現在では最新鋭の設備を導入し、桧材に比べてはるかに乾燥が難しいとされる杉材についても高いレベルでクリアできる態勢を確立しています。製材の含水率はＪＡＳ規格で定められているのですが、榎本さんの会社では高温蒸気式減圧乾燥機によって径の大きな木についても高い能力で乾燥させ、さらにマイクロ波による木材含水率の算出、木材を打撃して強度を測定する品質検査できちんと診断・評価して加工に回しているのです。工務店やエンドユーザーに国産材を安心して使ってもらうための製品作り。これもまた、榎本さんの終わりなき探求です。ちなみに木材の乾燥には多くのエネルギーが使われますが、榎本さんはバイオマス熱源装置を導入し、燃料には製材・加工の過程で出る樹皮や端材、おがくずなどを活用しています。木材というのは、およそ無駄になる部分のない自然資源です。

## ■公共の建物を木造化していこう

近年、林業にとって明るい兆しも見えてきたと榎本さんは言います。その一つが、平成２１年末に農林水産省から公表された「森林・林業再生プラン」です。ここでは日本の林業の再生をテーマにさまざまな施策が打ち出されており、そうした取り組みによって２０２０年までに木材自給率５０％を達成するという目標が掲げられています。木材自給率は、現状はひところよりやや持ち直して約２６％といいますから、ほぼ倍増しようというプランです。

またこうした流れを受け、平成２２年度には「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が成立・施行されました。これは林業の再生を図るために木材の需要を増やすことを目指すもので、公共建築物にターゲットを絞り、国が率先して木材利用に取り組もうという法律です。公共建築物の木造率は低く、平成２０年度では床面積ベースで７．５％。

今後はこれに対して、国はもとより地方公共団体や民間事業者にも国の

目が詰まった材

樹齢６０年生の杉

方針に即して取り組みを促し、住宅など一般建築物への波及効果を含め、木材全体の需要を拡大することを狙いとしています。例えば保育所や幼稚園、地域の集会場、学校など、低層の公共建築物については木造化が図られていくことになりそうです。木の香りと温もりの感じられる建物で子供たちが育ち、市民が集う。実現していけば、今より素敵な社会環境が形作られていきそうです。

## ■木材は温室効果ガスの貯蔵庫だ

環境問題の面からも、追い風が吹くかもしれません。平成２３年１１月から１２月にかけて南アフリカで開催された、ＣＯＰ１７（気候変動枠組条約第１７回締約国会議）。日本ではあまり報道されませんでしたが、この会議において、二酸化炭素の吸収源について「伐採後の国産木材も温室効果ガスの貯蔵庫として計測される」という合意が成されたのです。二酸化炭素の吸収力が衰えた高齢樹を伐採し、吸収力の大きな若い木々を植える林業のサイクルは、大気中の二酸化炭素削減に大いに役立ちます。

そして二酸化炭素を固定化した伐採後の木材も、京都議定書に基づく森林による吸収量として計測しようというのがこの合意です。これには輸入材は除外され、国産材のみが該当します。細部の詰めはこれからですが、国産材の利用促進につながる話題であることは間違いありません。

木の伐採作業

## ■この爽快感を未来に遺したい

今年植えた杉や桧が商品として出荷されるのは、５０年以上も先のこと。半世紀、一世紀先の需要予測など、立てられるはずもありません。それでも植林をするのは、未来の日本にもよく手入れされた山林と、木の温もりに包まれた住環境が変わらずにあり続けるようにという思いを託す行為にほかなりません。

国産材の販売拡大など、経営者として席の暖まる隙もないほど忙しく飛び回る榎本さんですが、今でも時間を見つけて林に入ることがあるそうです。そこにたたずんで風の音や鳥の声に耳を澄ませたり、木々の香りが漂う空気を肌で感じたり。そんな時、榎本さんが視線の先に見ているものは、今年の苗木が巨木に育ったはるか未来の林の中で、やはり大きく息を吸い込み爽快感に浸っている誰かの姿なのかもしれません。

# INTERVIEW2

「そのうちに」と思い続け、実現させられていない夢や目標。
どなたにも思い当たることがあるのではないでしょうか。
しかし念願だったという海外生活を、定年を待つことなく実現させたという
ご夫妻がいらっしゃいます。思い切りのいいその決断に至った背景や、
実際の海外生活の様子、近況などをたっぷり語っていただきました。

## ■型通りでない海外旅行を満喫

ご夫妻はともに北海道・函館で生まれ育ち、大学の先輩後輩として知り合ったそうです。卒業後、結婚され教員として神奈川へ。以来この地で暮らし続けています。神奈川への赴任が新婚旅行代わりだったという結婚生活のスタートでしたが、翌年には夏休みを利用してお二人でヨーロッパ旅行へ。まだ海外旅行が一般的でなかった１９７０年代前半、リュックサックを背に１カ月かけてヨーロッパを回るという旅はかなり時代の先端を行っていたのではないでしょうか。ほどなくお子さんが誕生したため、その後は揃って海外旅行に行くことは長い間お預けに。しかし二人の男の子に恵まれ、夏はキャンプに冬はスキーにと、お子さんたちの成長に歩を合わせながら一緒に楽しんできたそうです。

次に海外に出かけたのは、１９９４年。やはり夏休みを利用して、兄弟ダブル受験のお子さんたちを日本に残し、お二人でニュージーランドへ。当地ではセスナやヘリコプターをチャーターし、氷河スキーを存分に楽しんできたといいます。真冬の晴天の下、ご夫妻二人とガイド二人だけの白銀の世界は、優司さんいわく「人生最高の至福の時だった」とか。そして楽しかったこれらの旅行は、お二人をさらなる人生の楽しみへと誘う契機となったようです。

## ■定年を待たず 海外生活を断行

優司さんは北海道育ちで大学ではワンダーフォーゲル部に所属していただけに、スキーやトレッキングが好き。教育学部の美術専攻で、絵を描くのも写真を撮るのも好き。一時期は蒐集にも凝ったほどの蝶のマニアであり、生き物全般が好き。その上、若いころから「やりたいと思ったことは先延ばししないですぐにやる」という信条の持ち主ということで、家族との時間だけでなく、仲間同士で山歩きに行ったり、毎年絵画の個展・グループ展を開催したりと、たいそうアクティブに人生を謳歌してきました。

出産を機に教員を退職していたひとみさんも、子育てが一段落してからは好きだった語学の分野で行動再開。語学学校で初級英会話を教え、地域の外国人の方たちに日本語を教えるボランティアをするという日々を過ごしていました。そんな中、急な病に倒れ意識のもどらないままだったお母様を看取るという経験をされたひとみさん。人生観が変わるような出来事でした。やりたいことを来年やろう、５年後にやろうと思っても、人間いつ何があるかわからない。そのころ、ひとみさんは語学を教えるための勉強をきちんとやりたいという思いを抱いていました。さらにご夫妻には、行って帰るだけの旅行ではなく、海外で生活してみたいという考えもありました。優司さんの定年までもうあと数年というタイミングでしたが、それまで待つことなく、ご夫妻は行動に踏み切りました。ひとみさんは留学生としてオーストラリア・シドニーの大学院へ、優司さんは早期退職して配偶者ビザを取得

# 夢を先延ばしにしない、という生き方

山谷優司さん ひとみさんご夫妻

し、ひとみさんの勉強生活を支える主夫として、揃って日本を飛び立ちました。２００４年１２月のことでした。

念願だった海外生活はやはり楽しかった、と優司さん。家事の合間に、時間のある限りシドニーの街を回ったといいます。マウンテンバイクで、あるいは歩きで、写真を撮ったり絵の材料を探したり。ひとみさんは勉強漬けの毎日だったそうですが、それでも休日にはバヌアツやタスマニアなどへお二人で足を伸ばし、南半球のバカンスを満喫。２００６年２月の帰国まで、中身の濃い日々を過ごしてきたようです。

## ■ネパールの日本語教室で教える

日本に戻ったのも束の間、同じ年の９月にご夫妻は再び海外に向かいました。今度の行き先はネパールでした。日本で知り合ったネパール人の知人から頼まれ、ひとみさんが現地の日本語学校で日本語を教えることになったのです。今回は優司さんもアシスタントとして教室に入ることになりました。ネパールは高地というイメージがあるかもしれませんが、インドとヒマラヤ山脈の間の斜面に位置する高低差の大きい国。低地は熱帯でゾウやワニがいてバナナもいっぱい、高地はエベレスト山を始め８０００ｍ級の高峰を含む高山地帯、そしてその中間にある首都カトマンズでご夫妻は翌年の５月まで暮らしました。冬を越したことになりますが、東京よりも暖かく、雪もめったに降らなかったそうです。

いくつかあった選択肢の中からひとみさんがネパールを選んだのは山好きの優司さんのためでもありましたが、悪いことに優司さんはネパールに発つ直前に椎間板ヘルニアを患い、ひどい腰痛を抱えたままの渡航となってしまいました。現地での移動はもっぱら現地で購入したバイクと自転車。それ以前に一度トレッキングでネパールを訪れたことのある優司さんでしたが、この時は結局一度も山歩きには行けず、毎日のように屋上に上って双眼鏡で眺めるだけの生活だったとか。その心中はさぞやという感じですが、優司さんはその後２００９年に山仲間とネパールを再訪し、８０００ｍ級の山を含め存分にトレッキングを楽しんで見事リベンジを果たしてきたそうです。

モルドバにて、生徒さんたちと

## ■続いて東ヨーロッパの小国へ

さらにネパールから帰国したその年の９月、今度はヨーロッパへと向かいます。行き先は黒海近くの小国・モルドバ。インターネットでの募集に応じ、ネパール同様、ひとみさんが日本語教師、優司さんがアシスタントとして現地の大学付属の日本語学校で教えてきました。ネパールと違ったのは、ネパールの生徒さんは日本への留学希望者や仕事での必要上から日本語を学ぶ人が多かったのに対して、モルドバでは興味や教養として学ぶ人が多かったこと。世界的人気のアニメや、柔道、剣道などから日本に興味を持ち、日本語をもっと知りたいという人たちです。ロシア語、ルーマニア語をはじめ、数カ国語を話す人も珍しくないというお国柄。外国語を学ぶということに抵抗感がないのかもしれません。

山がほとんどない国だけにトレッキングはできませんでしたが、優司さんはここでも町中の散策を日常の楽しみに。また飛行機に３時間も乗ればヨーロッパのほぼ全域に行けてしまうロケーションということで、このモルドバ滞在時期に、ギリシアやルーマニア、クロアチアなどへの小旅行も楽しんだといいます。

長期滞在の日本人が5人しかいなかったというこの国で８カ月ほどを過ごし、２００８年の５月にご夫妻は帰国しました。

## ■そして日本で日常生活を楽しむ

これまでの海外生活の間、留守宅の番と愛猫の世話をしてくれていたお子さんも独立したことで、現在は日本に腰を落ち着けて暮らす山谷さんご夫妻。近ごろは膝が痛むというひとみさんですが、毎週１日は外国人ビジネスマンに日本語を教えに都内の教室へ。優司さんはといえば、週３回は体育館でバドミントンを楽しみ、今年も３回行なうという個展、グループ展のための絵画制作、そして空いた時間は天気さえ良ければ野へ山へ。今も完全ではないという腰をさすりつつ、相変わらず活動的な日々を過ごされています。アウトドアでの楽しみ方も一様ではなく、春はタラの芽、秋にはキノコと、見つけておいた穴場へ山の幸を採りに行ったり、蝶が見たいと思えば、やはりオオムラサキやギフチョウの集まるスポットをご存じだそうで、カメラを構えて何時間も待ち続けたり。山登りにしてもひたすら頂上を目指すというのでなく、途中できれいな蝶など見られたらそれで満足して帰ってくるのだとか。そんな風に日常を存分に楽しみつつ、一方ではまだ登ったことのない南米やアフリカの山に思いを馳せる優司さん。ひとまず今年は、前回歩けなかったコースを楽しみにまたまたネパールへ行くのだそうです。

やりたいことを「いつかきっと」で終わらせず、軽やかに実現していく山谷さんご夫妻。人生を楽しむとは、きっとそういうことなのでしょう。

丹沢の森のなかにて

# 自然素材工房のお宅訪問

## 自然素材にこだわる

南足柄の日当たりの良い丘に、S邸はあります。空気と水のいい場所を求めて探し回り、最後にご夫婦が選んだのがこの土地。坂道を上って行くと白壁に整然と窓の並んだその美しい建物は自然と目に飛び込んできます。「心惹かれたので是非、中を拝見させてください」とやはりこの辺りの土地を下見に来た人が突然訪ねてきたこともあったそうです。実はこのきれいに並んだ窓の配置も、奥様のこだわりの一つ。日本の住宅は内部の都合に合わせて窓を作る傾向がありますが、外観も美しくなるよう、窓の配置を考えた上で間取りを決めたといいます。家具との関係も同様で、以前からお使いだったお気に入りの家具の納まりを考え、柱の間隔などを調整していったのです。細部まできちんと考え抜き、設計・施工に反映させたことがこの美しさの理由の一つです。

場所にこだわったように、ご夫婦は家を建てるにあたってまず自然素材にこだわりました。奥様はアレルギー体質で、これまで住宅のせいで体調を崩したこともあったとか。それだけに自然素材を謳う工務店をいくつも見て回ったのですが、隠れたところに合板をあしらうなど、心から納得できる会社に巡り合えずにいました。また、家マニアを自認する奥様は小さい頃から住宅の間取図を見たりインテリア雑誌を読んだりするのが好きで、ご自宅を建てるにあたって当然実現したい思いがたくさんありました。しかしそうした思いも、煙たがられることが多くてお困りだったといいます。建材から意匠、内装まで、家づくりに対するあふれるほどの思い。「それらをすべて受けとめてくれて、しかも要所要所で適切なアドバイスをもらえた唯一の会社がトレカーサさんだったんです」とご夫妻は仰います。

## 手に入れたのは「理想の暮らし」

ご夫婦が探してきたというお気に入りのアーチ型の玄関ドアを入ると、完成から５年経った今も木の香りが漂います。１階の床は赤松の無垢材で、２階は杉材の板倉造り。１階の内壁は漆喰や土佐和紙などを使い分け、天井にも吸湿性も高い土佐和紙、断熱材にはセルローズファイバーと、まさに自然素材の家です。

水回りなどのタイルや自然石、木製サッシの窓やステンドグラス、おしゃれな照明器具、スイッチやコンセントのプレートなどは一つ一つ、すべて奥様が探して用意されたもの。ご主人のこだわりは意匠よりも基礎や構造にあったそうですが、「逐一注文を付けるまでもなく、やってほしいことはすべてトレカーサさんの標準仕様に入っていました」と笑います。ちなみに1階南側のウッドデッキは、あとからご主人が日曜大工で造り上げた力作です。

まさに思いを１００％実現させた家だけに、満足度も満点。何より健康になった、と奥様はいいます。アトピーが出ることもなく、以前は冷え性だったのに風邪一つひかなくなったそうです。またお二人とも、家で過ごすのが楽しくて休日の外出も少なくなったとか。理想の家を建てることは、理想の暮らしを手に入れること・・・ご夫妻の笑顔は、私たちにあらためてそう教えてくれます。

＊ セルローズファイバー ＊
主な材料は新聞紙です。粉々にした新聞紙に麻の繊維を混ぜて作られます。天然木質繊維の自然素材で、吸放湿性を持ち、適度な湿度を保つ大変エコな断熱材です。

＊ 土佐和紙 ＊
植物を原材料としているため身体に害が無く燃やしても環境を汚すことはありません。また、呼吸している為に自然に室内の湿度やホコリを吸収する性質があり、時間の経過とともに風合が良くなっていくのが特徴です。

## ●桃の節句

3月3日は「上巳」「桃の節句」などと言われ、厄を人形に移して祓った「流し雛」の風習がありました。それらが発展し、雛人形を飾り女の子の健やかな成長と幸せを願う現在の「雛祭り」となりました。

■ひなまつり今昔展
相模田名民家資料館
2月4日(土)～3月3日(土)
10:00～16:00

■あしがり郷瀬戸屋敷ひなまつり
足柄上郡開成町金井島1336番地
2月14日(火)～3月4日(日)
10:00～17:00（最終入園16：00）

## ●相模原　桜まつり

相模原市観光協会様より写真提供

相模原市民桜まつりは、昭和49年（1974年）に市制施行20周年を記念して相模原のふるさとづくりをテーマに始められたました。

「70万人のふるさとづくり」「人・もの・自然、すべての共生を求めて」のコンセプトのもと、 市役所さくら通りを主会場に市民の手づくりによる催し物や市民パレード、 絵画コンテストなど盛りだくさんの内容で皆さんをお迎えします。

■DATA■
4月7日（土）13：00～17：00
4月8日（日）10：00～17：00

## ●泳げ鯉のぼり相模川

相模原市観光協会様より写真提供

昭和63年から開催され続けている、相模原の代表的な祭りです。相模川の両岸に5本のワイヤーを渡し、約１２００匹の鯉のぼりを泳がせます。五月晴れの大空を泳ぐその姿は、実に雄大です。

相模川の自然、子供たちの成長、人と人とのコミュニケーション、さらには相模川を共有する全ての人々による新たな文化の創造に寄与することがイベントの目的です。

■DATA■
4月29日（金・祝）
13：00～開会式
～5月5日（木・祝）
開催場所：高田橋上流河畔

## ~Let's hand made~

■『クリーミィアロマクレンザー』をつくるワークショップが行われました。環境にも家族にも優しいクレンザーです。是非お家でもやってみましょう♪

●準備するもの
・重曹
・液体石鹸
・ビネガー(穀物酢)
・精油(お好きな精油)

●作り方

①ボールに重曹１カップと液体石鹸50ccを入れてよく混ぜます。

②ビネガーを大さじ1杯ふりかけ、混ぜます。

③クリームのようになってきたら精油を加えて混ぜます。

④ケースに入れて出来上がり。

講師：ブルーム香房 東山さん
愛甲郡愛川町半原2799／046-281-6770

# ふる里の森へ還る自然回帰の家

## 新シリーズ登場！！

### 『木組みの家』

伝統工法といわれる、手刻み・竹木舞・土壁等、
昔ながらの工法でつくる家創り。

### 花鳥風月

春に花、
夏に涼しさ、
秋に風を感じ
冬に月が見えれば、
それ以上何を求めるのでしょうか。
高気密にして自然からの環境を遮断して人口的に
作り出した住環境の結果、
精神的健康、身体的健康に
悪影響を与えたことへの反省。
家族を包み込む家が健康であるために
「自然素材」を使った本物の家創りを思考する中で、

木 竹 炭 紙 土 殻 貝

を原料とする家づくりが始まりました。

・・・詳しくはHPまで！！

### 『樹の家』

無垢の木をふんだんに使い、
漆喰や石や和紙、自然素材
だけで構成した自然に還る
家創り。

### 『板倉づくりの家』

柱と柱の間に3センチの板を
落し込む、昔ながらの工法
です。板の持つ独特の粘り
で、地震の横揺れを吸収
する減衰工法。

冬の暖は薪ストーブで。
電気もガスも使わない、エコで自然な暮らし方。

### 『エコリフォーム』

ライフスタイルや家族構成
の変化、設備の老朽化等、
時が経つにつれ住まいには
様々な問題が起きてきます。
そんな住空間の悩みを解消
するのがリフォームです。


自然素材工房
株式会社トレカーサ工事
神奈川県愛甲郡愛川町中津2179-1
TEL:046-286-1272
http://www.trecasa.co.jp

# イベント情報

## 第2回自然素材工房塾

●『なぜ、森を守る事が大切なのか？
　緑のダムとは？伝えたい想いは・・・？』
講師:NPO法人 「緑のダム北相模」 石村さん
●『手刻みへのアツイ想い』
講師:大工　長谷川さん
2012年3月25日(日曜日)
時間:13:00～16:00
開催場所:ギャラリー喫茶『なよたけ』

●菜の花祭り出店予定
無農薬野菜・飲食物など
いろいろお店が出ています！
2012年4月14日(土)
時間:11:00～14:00
開催場所:峰の原
雨天延長→15日(日)

## 週末、行ってみませんか？

●Earth　Day　Tokyo2012
地球のために誰もが自由にその人の
やり方で地球環境を守る意思表示を起こしましょう
無農薬野菜・飲食物などいろいろお店が出ています
2012年4月21～22日(土・日)
時間:10:00～18:30
開催場所:代々木公園ｲﾍﾞﾝﾄ広場＆ｹﾔｷ並木

## 参加してみませんか？

●Peace　On　Earth
311東日本大震災　市民のつどい
2012年3月10～11日(土・日)
時間:11:00～19:00
開催場所:日比谷公園
噴水前特設ステージ

**～2012年とれとれFarm動きだします～**

自然農法に興味のある方・・・
土と触れ合いたい方・・・
安全，安心な食品をつくりませんか？
一緒にサツマイモを育てませんか？

**・・・会員大募集中・・・**

応募多数の場合、抽選になります。

年間予定　：　4月　地ならし
　　6月　植え付け
　　7，8月　草むしり
　　10月　収穫

講師:『食の安全』から諏訪部氏
会費:￥1，000円/年

花鳥風月
~communion with nature~

## ■フリーペーパーの内容について

「こだわりをもってものづくりをしている人」のこだわりや本物志向の考えを、皆様にお届けしていきます。
加えて、生活に役立つ身近なエコ情報なども掲載。読む人が楽しく学べて、環境循環型の生活が身近に感じるフリーペーパーを目指します。

## ■発行会社

注文住宅の工務店。『人と自然の調和を図り、建物を通じて社会に貢献すること』を企業使命としてやってきました。それらを実現させるため国産木材・化学薬品を使わない自然に還る「循環型の家づくり」に取り組んでいます。

株式会社トレカーサ工事
〒243-0303　神奈川県愛甲郡愛川町中津2179-1
TEL:046-286-1272　FAX:046-286-3452